HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代マニラの都市底辺世界における仕事時間
Author(s)	石岡, 丈昇
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く　：　持続可能な発達の支援のために」　シンポジウム報告書, 73-80
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49389
Type	proceedings
Note	D：シンポジウムIII　テーマ：労働の場での発達　「遊ぶ・学ぶ・働く　：　持続可能な発達の支援のために」シンポジウム報告書：子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画).　平成23年11月2日(水)～4日(金).　北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟　教育学研究院会議室.　札幌市
File Information	Ishioka.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「現代マニラの都市底辺世界における仕事と時間」

発表者：石岡　丈昇
（北海道大学）

はじめに ── マニラの貧困世界と時間的予見の剝奪

よろしくお願いします。北海道大学の石岡丈昇と申します。私は大学院時代からずっと 10 年間ぐらい、マニラの非常に貧しい人たちが暮らすエリアのことについて、フィールドワークをおこなっています。実は、先週もマニラにいました。今日はそういったマニラの貧困世界の中で、仕事があるとか働くということは、一体どういう営みであるのかについて話します。マニラでは慢性的な失業が社会問題になっているのですが、そこから働くことの意味について、照らし返してみたいと思っています。

最初に今日の報告の目的を述べます。現代マニラのスクオッターというのは、不法占拠地帯で住所はないんですね。ですから、公有地みたいなところに掘っ立て小屋とかを造って、実質的にはそこを占有して暮らしているようなエリアなんです。こうしたエリアは、マニラには非常に多いです。当然インフラ整備はされないし、雨が降ったら洪水とかは日常茶飯事です。そういったマニラのスクオッターに暮らす人びとの生活を見たときに、そこではいったい何が奪われているのかという問いを立ててみたいと思います。いろいろなものが奪われているということができると思うんですよね。たとえば仕事がないわけですから ──「ない」というと語弊がありますけれども、非常に厳しいものですから ──、「基本的な経済生活が奪われている」と訴えることもできます。もっと抽象的に海外の NGO の研究だとかが好きな言い方をすると、「基本的人権が奪われている」とか、「人間の尊厳が奪われている」とか、そういう物言いでもいえます。しかし、僕はそういう言い方ではなくて、そこでは「時間的予見が奪われている」ということをこれから 30 分かけて話そうと思います。

僕が今日話したいこというのはこの 1 点ですので、この 1 点をひたすら話そうと思います。じゃあ、その時間的予見が奪われているというのは、いったいどういうことなのか？　この報告でいいたいことは、仕事というのは、働くということは、時間的予見の準拠枠を生み出すことなんだということです。だから、失業というものをそこから考え直してみるということが今日の報告の趣旨です。

あと 1 ついっておきたいのが、僕が話をすると、学会とかでもそうなんですけど、こういう風にいわれることがあるんですね。「石岡さんは、日本に暮らしている僕たちとは遠く離れたマニラの世界のことを研究されているんですね。絶対的な貧困というのは、こういうことなんだね」というようなものです。でも、こういった類で、僕の話を聞いて欲しくないです。今日は、できるだけ、そういうふうな理解のされ方ではなくて、マニラの個別性にこだわりながらも、そこの世界を見ることが実は私たちと地続きにあるのだということを伝えたいです。マニラにこだわるんだけどマニラに閉じた話ではなくて、もうちょっとそれを現代日本の文脈とつなげたり、働くことの意味を捉え返す参照地点としてマニラを見る、そういった比較社会学的な観点で報告をしたいと思っています。

ラップの流行

それで、話はいきなりラップミュージックになるんですけど、最近マニラではラップが流行っているんですよね。ラップといっても「ヨー、チェキ、ヨー」みたいな感じで、クラブとかで ──「クラブ」というとうちのゼミ生には「いや、それは先生、昔の話です」といわれたんですけど ── 流れるラップじゃなくて、スクオッターの長屋でラップを歌うんです。ラップが流行っているというのは、もちろんラップという独自の文化形式がどうマニラに入ってきたかという過程と関係するから、直裁にはすぐに失業がより厳しくなったからラップが増えたなんてことはいえないんですけど、要はとにかくラップを愛する若者が増えています。それで、ラップのリリックというのは、当然仕事に関するものが多いんですね。

（ビデオ上映）

これは僕が撮影したものです。機材がないですから、携帯電話などのボロい音源とこの手のププっという音を合わせて、ラップを歌うんです。これを周りのみんなで聴きながら、ビールとかを飲むんですね。こういうラップを聴いていると、そこにいる周りの若者たちの間に「そうだよね、そうだよね」みたいな共感の共同体みたいなものが出来上がるんですよ。こういうふうなものが、マニラの貧困世界に息づいている。

歌詞の中身は、「仕事がなくて俺の人生こんなになっちまった。どうしてくれるんだ、この野郎」みたいなものが多いです(会場笑)。なんですけれども、ここで気を付けなくちゃいけないのは、その「仕事がなくてどうしてくれるんだ、この野郎」というときの、「この野郎」の意味というのはそんなに簡単ではないということです。「この野郎」の意味というのは、「仕事がないんだからお金がなくて大変だよね」というふうに考えてしまえそうなのだけど、実はもう少し深いところにあるんじゃないか。「この野郎」という表現の中に籠められた奥深い感覚の在り処に、僕たちはどう接近できるかなと考えています。

僕は、専攻は社会学ですけど、社会学者の責務というのは、自分が持っている観察者としてのモデルをそのまま現実に当てはめることではありません。自分の物差しとか自分の見え方ではもうたどり着けないような世界があるかもしれなくて、その世界をこちら側のレンズを付け直すことで見直すということが、社会学者のフィールドワーカーがすることだと思うんですよね。ですから、「第三世界の貧困はこうだからこうなんだ」という形の自明の枠に閉じたことを語るのではなくて、「この野郎」といったときの意味は、実は僕たちが思い付かないような「この野郎」なのかもしれないと考えてみることが必要になります。こうした見地で「この野郎」について考えてみたときに、僕の中で「時間的予見」という主題が登場してきました。

時間的予見の定義

それで、スクオッターの社会問題についてですが、インフラの未整備問題とかもありますし、家族生活の問題もありますが、最たるものは失業とそれにまつわる貧困です。じゃあ、失業は何が問題かというふうに、敢えて突っ込んで考えてみましょう。先ほどの川村先生の報告でいうと１番目のところですよね、「そもそも仕事があって」というところが川村先生のご報告の１番目の前提になりますけど、その前提が崩れた社会とはどうなるかということを考えてみる必要があります。

失業の何が問題かということに対して、欧米の研究者、日本の研究者も含めて第三世界の都市研究をする人たちというのは、「収入の額が低いことが問題である」と考えるんです。だから第三世界の貧困研究を見れば、年間世帯収入というのはいくらあって、それに対して消費の額はいくらあって、その足し算、引き算をする中で、どれくらいの家庭生活が営まれているかということを類推する研究が量産されます。あるいは貧困線の算出ですね。これは日本でも、ヨーロッパでも、マニラでもやられるわけですけど「政府発表と NGO 発表と研究者発表では貧困線が違うのだけどどれが妥当か？」というような議論が頻繁におこなわれます。

以上は、ざっくりまとめると、貧困を「額」の水準で考えたものです。こういう研究は圧倒的に重要

ではあります。これを抜きにして議論はできませんから。でもだからといって、この貧困の「額」の水準に徹した方法論のみで研究を追求していっても、なかなかさっき述べたラップの「この野郎」の感覚には辿り着けないんじゃないかと、僕は考えています。かわりに僕は、貧困を「額」の水準ではなくて、収入の「間隔」の水準で考えてみようと思います。そこから、当事者にとっての貧困の恐怖というのは、「今後を見えなくさせて、絶えざる今に当事者の思考を縛り付ける点」にあるんじゃないかと捉えてみたい。たとえば、マニラで年間収入が1,000ドルあるとして、これが一括でぽんと払われるとしましょう。1,000ドルというのはものすごいお金なんですけど、でも、次にいつ年間収入が入るかわからない中での1,000ドルの渡され方と、1,000ドルの年間収入なんだけど毎月一定日に80ドルずつ12カ月かけて支払われるという状態があるとします。そうすると年間1,000ドルという年間所得の額は一緒であったとしても、「一括払いで次はいつになるかわからないよ」という状態と、1,000ドルを分割して毎月払われる状態を比較すれば、後者の方が圧倒的に生活が安定しているといえます。

このことの含意は何でしょうか。前者だと次にいつ収入があるかわからないから、1,000ドルというすごい大きなお金があっても、今後をどう見据えるかという展望は結構不安定になってしまう。しかし後者だったら、80ドルが毎月入ってくるということを前提にして、今後の生活を組織化していくことができるんです。こういうふうに今後の暮らしをどういうふうに構想していくかという視点のことを、この報告では「時間的予見」と概念化したいと思います。スクオッターでは収入の「額」というよりも収入の「間隔」が不規則化されることによって、時間的な予見が奪われるんです。この点にこそ貧困の生活内在的な恐怖を見据えたいのです。以下では、失業について、この1点を手放さずに考えていこうと思います。

その前に1つ補足をしておきます。スクオッター生活に見られる共通の価値感覚とは、どういうものなのかについてです。イメージを掴みづらいと思うので、ここで説明しておきましょう。それは端的にいうと「無事の志向」です。将来の利益を最大化するような起業家精神みたいなものではなくて、今ある暮らしを今後も継続させるようなそんな無事の精神です。ですからたとえば今のお金を元手にしてこういうふうな小口のビジネスにして、さらにこうやって増やしていこうみたいな、そういう起業家的な予測と投資といった観念はなじまなくて、今ある暮らしをどういうふうに今後も暮らしていけるだろうか、継続していけるだろうかという点に、ポイントがあります。言い換えると、現状モデルをどう将来にわたって再生産できるかというところに、スクオッター生活の大きな共通の価値があります。

たとえばある研究者の言葉を引用しておきましょう。これは農民の話ですけどスクオッターにも当てはまると思います。「農民は前年の所得に従って消費するのであって、これからの所得を見込んで消費するのではない」(ブルデュー　1993：p 23)。これはその通りだと思います。「今後こうなるかもしれないから今はこうしておこう」みたいな、不確実な未来に基点を置いてそこから現在を改良するというのは、予測とか投資の観念に該当します。そうではなくて今あるものに従って消費する、現在を基点において未来を構想するという点に――これが予見です――、スクオッター住民の基本的姿勢があります。それで失業とか貧困というものは、今の暮らしを今後も継続しようとするその土台に介入するものですので、時間的予見の崩壊を生み出します。未来が崩壊していくわけですね。本報告ではそういう側面を見ていきたいと思うわけです。

今日のスクオッターの状況

では、スクオッターの話に移りましょう。スクオッターといっても昔から延々と変わらずにあるわけじゃなくて、非常にグローバリゼーションですとか、2000年以降はいろいろな経済の問題というのが第三世界にも入ってきますので、それに影響を受けています。よく第三世界の貧困というと、永続的に変わらないようなイメージとして考えてしまいがちですが、それでは現状とズレてしまいます。まずは、現在の政治経済状況と絡んだスクオッターの状態というのを話します。

今日は、マニラの都市底辺世界というふうに概念化してみたんですけど、この報告では「都市底辺(the urban bottom)」という概念を使用します。「都市貧困（the urban poor)」とは基本的に呼ばないようにしたいと思います。「都市貧困層」というとわかったようでわからないようなところがあって、それがいったいどういうことなのかということをもう少し詳しく見るために、あえてアーバンボトムというような言い方をしたいと思います。この点については、マニラの貧困問題について精力的にご研究されている青木秀男先生から示唆いただきました。このように概念を設定することの問題意識は、最近マニラのスクオッターで強制撤去が増えている点と関係しています。ブルドーザーで家屋が壊されていって、そこに新しいビルや高速道路が建つというのが結構おこなわれるんですね。だからホームレスが増えるんです。ホームレスが増えるというのは経済的な状況で増えるんじゃなくて、物理的な撤去によって増えるわけです(青木　2007)。だから、今日のマニラの貧困について考えるなら、スクオッターだけではなくて、新たに生み出され続けているホームレスの人びとをも含めた範疇が必要になります。それでスクオッターとホームレスを包含する範疇として「都市底辺」と呼びます。今日のグローバル化したマニラの都市の下層の話を、こういうふうに押さえてみたいと思うわけです。

マニラのスクオッターの世帯数はどれぐらいあるのかというと、簡単にいいますとマニラ全体の３分の１ぐらいなんですね。ものすごい数です。でも間違えてはいけないのは、現在のグローバル化したマニラの中では、スクオッターでありながら実は成り上がりの人もいたりするんです。ですから貧困の額でいうと貧困線を上回るような人もスクオッターにいますので、この数がダイレクトに貧困の数とはいえない点は注意が必要です。ともかく多くは貧困世帯ですけど、そういう世帯がこれぐらいある。さっきもいったように2000年以降に土地の価格が高騰していって、どんどん投資が、海外の資本が入ってくるようになって、よくいわれるネオリベラリズムという動向がマニラにも来ます。そういう状況の中で強制撤去とホームレスの増大ということも起こってきている。スクオッター内部の階層分化というのが起こってきているわけです。

では、ネオリベラル化する都市空間ではどのような変化が生じているのでしょうか。これはコンネルという人が英語の論文でいっているんですけど(Connell 1999)、現代マニアの特徴は「ウオール」と「モール」と「プライベートスペース」だと示しています。「ウオール」というのはゲーテッド・コミュニティのことで、防壁されたコミュニティのことです。こういう壁がずっとコミュニティの外壁としてあるわけです。そうですね、イメージでいうと何とか町内会に入るにはこの壁の中に入らなきゃいけないみたいな、そんな感じです。その何とか町内会、というか、そのサブデビジョンに入るためには、ゲート前の守衛にIDを見せないといけないんですね。こんなゲーテッド・コミュニティが、2000年以降、非常に増えました。日本人の駐在員とかは、ほとんどこういうゲーテッド・コミュニティに暮らしています。

次に、「モール」というのはショッピングモールです。この画像は、モール・オブ・エイジアというものですけど、アジアで一番大きいショッピングモールを目指して、建造されました。造ろうとしたら今度は上海にもっとでかいのができちゃって、もう４番目ぐらいになってしまいました（笑)。とにかくショッピングモールというのもすごい勢いで増えている。三番目の「プライベートスペース」というのは、高価な家がどんどん飛ぶように売れていくという状況があります。マニラの中でもセントラルビジネス地区のあたりだったら、英語の論文ですけど「スカイロケッティング」な地価上昇が生じていると指摘しています(Shatkin 2004)。スカイロケットが打ち上げられるように、ものすごい勢いで地価が上がっていることを表現しているわけですね。このようにスカイロケッティングに地価が上昇して、マニラがグローバル化して、外国人ツーリストが増えた面をもって、マニラは発展しているじゃないかという人もいます。こうした表面的な発展を支えているのが、セキュリティーの上昇です。路上の軍事化という人もいますけど(Wacquant 2008)、銃を持った守衛が至る所に出てきました。あとマニラの中心部は、スクオッターの強制撤去をして、新たな建造物に模様替えしようとする動きが起きています。それ

で、言説としては、マニラは危険が増していると話題になるんですけど、統計的に見ると、別に危険になっているわけではありません。単に危険意識が上昇しただけですよね。実際の危険ではなくて感覚上の危険が上昇したということです。ともあれ、このように貧困層とそうじゃない中間層以上の間に、モールだったりウオールだったりみたいな形でいっそうの物理的線引きがされていく状況が、今日のマニラにはあります。そういう中でスクオッターの強制撤去というのも展開されていくわけです。

貧民を覆う暮らしのスペースの外は、こんなグローバル化の影響を受けているんですけど、スクオッターの内部も変化していて、さっきもいったようにスクオッターの中にはグローバル化に便乗して貧困線を上回るような世帯も登場するようになりました。しかし、もう一方で、先ほども触れたように、ホームレスも増加していることを注視する必要があります。

失業が奪うもの

ここからは、階層上昇を果たしていくようなスクオッター住民ではなくて、依然厳しい経済状態を強いられている人びとの暮らしを見ていきたいと思います。都市底辺世界の仕事というのは、この画像のように自転車でスクラップを集めたりとか、乗り合いジープのドライバーをしたりとかいったものです。タクシーの運転手の人もいますし、工場で働く人とかもいます。中にはスクオッターにいながら最新のショッピングモールで売り子さんとして働いて、でも帰宅するのはこういうジープに乗って、という女性も最近出てきました。でも基本的には雑業収入が圧倒的な多数で、あと収入間隔というのが不規則化しています。

１つ例を出します。これは僕の知っているボクサーの例です。ボクサーの例を取り上げると ── この例を取り上げるのは僕の研究主題に拠るのですが──、貧困の話でそんな特殊な例を挙げるなと怒られそうですが、でも表面的には特殊な例ではあっても、スクオッターにはこれと同じような例は枚挙にいとまがないですので、問題ないかと思います。職業としては特殊ですけど、しかし収入間隔の不規則化という主題からいうと決して特殊ではない、ということで説明をしたいと思います。

まず、2005 年の事例なんですけど、彼の年間収入は 3 万 9,200 ペソでした。これは同年のマニラの平均世帯収入である 30 万 304 ペソと比較すると、13%に過ぎないんですね。マニラだとお金持ちの人は本当にお金持ちですので、別に 13%といっても、スクオッター住民としてみると、低いのは低いですけど最低レベルというわけではないです。これを 12 カ月で割って算出される月収は、3,266 ペソになります。日本円にするとだいたい 2 倍ですから、月収が 6,500〜6,600 円ぐらいですね。年収は 4 万ペソと考えて、8 万円ぐらいでしょうか。スクオッターの生活というのは最低 5000 ペソは一ヶ月の生活費が掛かるといわれますので、やっぱりそれは下回っていますので、スクオッターの中でも厳しい状況にあることは間違いないです。

ここでポイントになるのが、こういう数字は抽象的な数字であって、実際の生活を考えるためには、この年間収入の話じゃなくて、この年間収入がどういうタイミングで得られたかという「間隔」を論ずる必要がある、ということです。彼は、3 月の試合を終えてから 7 月の第 1 週目まで、次にいつ収入があるかわからなかったんです。7 月の第 1 週目にようやく、7 月 21 日に収入が得られるかもしれないということがわかりました。そして、7 月 21 日に試合をして収入を得ました。そこからは、また、次の収入がわからない。8 月 20 日に次の試合スケジュールが決定したので、今後の収入の目途が立ち、そこでまた、「ああ、じゃあ、こうなるんだ」という展望を手にしました。だから単に年間収入が総額でこれだけあったというだけじゃなくて、このタイミング、収入を得る間隔のタイミングとしては、次にいつ収入があるかわからない、そういう不安の中で日々を送っていることを考える必要が出てきます。

仕事があるということは一体どういうことなのかといったら、今はお金がなくても当面の暮らしをいつまで辛抱すればいいのかという予見がそれによって獲得できるということです。この時間的予見があったら、それを準拠点にして、スクオッターの雑貨屋で信用買いとかも可能になるんです。何月にこ

ういうふうなお金が入るから「今はつけにしておいて」という言い方ですね。でも、時間的予見が崩壊すると、そうしたつけ買いすらできなくなって、生活の組織化というのが崩壊してしまいます。実はスクオッターで生きていく場合、そこには人びとのものすごい知恵が凝縮されているわけですけど、その知恵の最たるのは、次のようなものです。さっきいったようなつけ買いが、ひとつです。あと所帯の居候戦略といって、たとえばある一家が困窮しちゃって次にいつ収入があるかわからないといったら、いきなり夫が妻と娘を連れて、別のお宅に荷物も丸ごと持って行くんです。そうすると、訪れられた側は断れないんですよね(笑)。それで、夫が収入を得たら、再度、分離していくんです。いつまでも迷惑は掛けられないので。でも、重要なのは、今後その受け入れた側の世帯が困窮したら、彼らはかつての居候人のところに押しかけることができるという点です。こういった居候の互助が息づいているんですよね。そのことによって一番元手の掛かる生活の基礎費用みたいなものを削減するわけです。スクオッターといってもなぜか家賃はあるんですよ。空き地であっても、そこに家を建てた人がその人の家だといっちゃうから、スクオッターでも家賃を払わなきゃいけないんです。それに水代だったり電気代がかかわるわけですけど、所帯の居候みたいなことを互いにやり合ってコストをなくすということをするわけです。

でもこれもいついつになったら何とかなりそうという目途を前提にしているところがあって、これが完全に崩壊してしまうと、所帯の居候戦略も取りにくくなってきます。ですから、こうした生活実践というのは、実は時間的予見を暗に前提にしているんですけど、収入間隔の不規則化と時間的予見の崩壊というのは、こういうふうな住民間の生活実践をも不安定化させていくんです。だからこうしたスクオッターに住む人びとの生活の苦しさというのは、収入の額が少ないこともあるんですけど、収入の間隔が規則化されてないことによって、時間的予見を前提にした暮らしの組織化が失われてしまう点にあります。当事者にとって、失業の恐怖というのは、この点にあります。

１つ触れておかなければならないのは、スクオッターの職は、やっぱりパトロンとクライアント的な関係の中で配分されているという点です。「それは民主主義の阻害要因だ」とか、いってもしょうがないようなことを物知り顔でいう政治学者って結構いるんですけど、実態としては地元で政治力を持った大物が、何らかの形で雑業とかを取り仕切っているわけです。それが、グローバル化したマニラでは、そういうパトロン－クライアント関係を解体してしまって、近代的労使関係みたいなことをつくっていったんですね。６カ月の非正規雇用とかなんですけど。そっちの方に移行することによって、パトロン－クライアント的な職の配分方法が減少しました。そして、パトロン－クライアント関係を解体することが、逆に、スクオッターの人びとの不規則労働を増加させている状況があります。

まとめとして ── 時間的予見の崩壊を注視すること

まとめに入ります。今日報告したようなことをどう考えるかということなんですが、フランスの社会学者でピエール・ブルデューという人がいます。ブルデューというのはいろいろなことをいっているんですけど、彼が研究初期の50～60年代ぐらいにアルジェリアで調査をしたときに、「生活が営まれる時間と空間の枠組みの体系というのは、規則的な労働が与える準拠点がなくては作ることができない」(ブルデュー　1993：118)といっているんですよね。どういうことかというと、労働による時間的・空間的枠組みを獲得することによって、初めて人間の生活というものは安定するわけであって、その労働というものがなくなってしまうと生活の準拠枠が崩壊してしまうということを、ブルデューはアルジェリアから考えたわけです。ですから月収とか年収というふうな抽象化された数字に頼って考察していては、このブルデューの主張とずれてしまいます。この報告で一貫して述べてきたように、いつどのタイミングで働いて収入を得ることができるのかという収入間隔の主題ことを、ブルデューは当初からずっと手放さずに生涯を送りました。その点はたとえばブルデューが2000年代になってネオリベラリズム批判をするときでも、何で不安定就労が問題かというと

きに、「生活の時間的構造が失われるからだ」というんですよね（ブルデュー　2000：134）。新自由主義的な政策が前面に出てきたときに、学者の多くが、「これは生活を破壊するものだ」というふうにいいました。いいましたけど、じゃあ、その「生活の破壊」ってどういうことなのかということについて、まともに考えた学者がどれくらいいたでしょうか？　たとえばアンソニー・ギデンズというイギリスの社会学者がいて、彼は「存在論的な不安を引き起こす」というんですよね。Ontological insecurity だと。でもそういうふうな抽象的な物言いでは、事態を掴まえられない。やっぱり僕たちフィールドワーカーから見れば、「存在論的不安」っていうのは、何かをいったようで何もいってないという感がありますし、よくわからない。

ブルデューであれば、明確に時間的構造の問題として語るわけです。そしてそのことは、たとえばアメリカの黒人ゲットーについて非常に優秀な本を書いた、ウィリアム・ジュリアス・ウィルソンにも受け継がれていったわけです（ウィルソン　1996）。

ブルデューの主張をまとめると、「諸個人から時間的予見を奪うから不安定就労が問題だ」ということになります。こうくると、僕たち調査をする人は、どういう調査ができるかと考える必要があるでしょう。これに対する僕の見解としては、貧困層と呼ばれる層の内部に１つの区分線を引くことができるんじゃないかと考えています。だからマニラの調査をする場合でも、収入の額とか世帯の消費の額とかも大切なんですけど、とにかく収入の間隔を調査してみる必要があります。収入間隔が一定程度、安定している層と、それがデコボコな層というのが貧困の中にもあって、それは「額」でいうと1,000ドルなら1,000ドルで一緒になるんですけど、ただその1,000ドルの時間的配分の問題を調査してみると、貧困層の内部にある生活の安定具合を調べることができるんじゃないかと思っています。収入「間隔」の観点より貧困層内部の階層分化を捉えてみるということを、これから私の方ではやってみようと考えています。

最後に補足ですが、今日の報告に向けて準備をする中で発見したことがありました。それは、僕がマニラを事例に捉えようとしていることは、実は北大の社会学の先生だった鈴木榮太郎が『都市社会学原理』の中ですでに言及していたという点です。この本は、今でも非常に示唆に富んだ本であることが間違いないです。これは『都市社会学原理』の１文なんですけど、「生活時間の型の相違が、職業別にではなく社会階層別に現れているのは興味ある事である」（鈴木　p 155）といっていて、この行なんかにはドキッとするところがあります。鈴木榮太郎は、生活時間には社会集団に応じた差異があって、その差異こそが階層を示していると主張するわけです。いいですか、所得とかではないんです。「生活時間の差異が階層を示しているんだ」と言い切っていたことの意味というのは、今から考えることもできるんじゃないかというのが補足の１点目です。

あともう１つは、アン・グレイという人が2004年ぐらいに書いた有名な本で、*Unsocial Europe* というものがあります。この中でアン・グレイは、flexploitation という概念を提唱しています。これは造語で、フレックス制（flex）が新たな搾取（exploitation）を生み出している点を含意したものです。この概念はヨーロッパを中心に一時期すごく流行ったんですけど、この flexploitation も、単に資本の需要に応じて時間面で柔軟に人を配置して合理化しているだけだと解釈すると、核心を外していると思います。それは、単に人びとを合理的に配置しているというだけじゃなくて、そのことによって人びとの時間的予見を奪っていることを考える必要があるでしょう。フレックス制が導入されることによって、働く側の、この報告でいったような時間的予見が混乱されているという点にまで踏み込んで、flexploitation を考えていく必要があるんじゃないかと思います。

ということで報告は以上です。今日報告した内容は、2012年２月に刊行する『ローカルボクサーと貧困世界』（世界思想社）という本の中で若干触れましたので、関心がある方は手に取っていただければと思います。どうもありがとうございました（拍手）。

文献

青木秀男，2007，「フィリピン・マニラのストリート・ホームレス ── グローバリゼーションと都市変容の表徴として ──」，『ヘスティアとクリオ』5：31-52

Bourdieu, P., 1977, *Algerie60: Structures économi-*

ques et structures temporelles, Les Editions de Minuit（原山哲訳，1993，『資本主義のハビトゥス』藤原書店）
——, 1998, *Contre-feux: Propos pour servir à la résistance contre l'invasion néo-libérale*, Raisons d'agir（加藤晴久訳，2000，『市場独裁主義批判』藤原書店）
Connell, J., 1999, "Beyond Manila: Walls, Malls, and Private Spaces", *Environment and Planning* A 31: 417-439
Grey, A., 2004, *Unsocial Europe: Social Protection or Flexploitation?,* Pluto Press.
石岡丈昇，2012，『ローカルボクサーと貧困世界 —— マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社
Shatkin, G., 2004, "Planning to Forget: Informal Settlement as 'Forgotten Places' in Globalising Metro Manila", *Urban Studies* 41(12): 2469-2484
鈴木榮太郎，1957，『都市社会学原理』有斐閣
Wacquant, L., 2008, "The Militarization of Urban Marginality: Lessons from the Brazilian Metropolis", *International Political Sociology* 2: pp56-74
Wilson, W., 1996, *When Work Disappears*: *The World of the New Urban Poor*, Vintage（川島正樹・竹本友子訳，1999，『アメリカ大都市の貧困と差別 —— 仕事がなくなるとき』明石書店）